

「文明の危機」を乗り越えるために

「古典学の再構築」領域代表 中谷 英明

「古典学再構築」の領域代表中谷です。本日は大変多くの方にお集まり頂き、本当に有難うございます。とりわけ長時間の飛行機の旅によってお越し下さった外国からの講演者の方々に厚く御礼申し上げます。

今回のシンポジウムは、文部科学省科学研究費特定領域研究「古典学の再構築」が主催しています。評議委員である藤澤令夫先生が大会委員長として指揮され、調整班「古典の世界像」代表内山勝利氏が準備委員会委員長として万端を企画・準備下さいました。有難うございました。また、日本学術会議の東洋学研究連絡委員会には共催団体としてご協力頂きました。同委員会を代表して出席頂いた辛島昇委員長にお礼申し上げます。そのほか外国からの研究者招聘の任に当たられた7人の方々を含め、会議の準備に協力を惜しまれなかつた多くの方々に感謝申し上げます。

さて今日は「文明の危機を乗り越えるために」という題目で報告します。それは、私見によれば、「古典学」は世界の諸文明の再構築に貢献することができ、これが「現代文明の危機」の克服へ向けての第一歩であると考えられるからです。

このような見通しが立ったということが、これまで4年余に渡って遂行してきた特定領域研究「古典学の再構築」の重要な成果であると私は考えています。そこでまずこの「古典学の再構築」の概要紹介から始めますことをお許し下さい。

1. 特定領域研究「古典学の再構築」の概要

古典学の全領域を結集したこの共同研究の構想は、1996年秋に16人の研究者が東京に集まって開かれた準備会から始まりました。そして1年間の討議の末、「諸文明の古典学の連携」と「情報処理技術の応用」を2本柱とする特定領域研究「古典学の再構築」を申請しました。幸いこの申請はただちに採択さ

れ、1998年夏に、約80名の計画研究者が7つの研究班、すなわち「原典研究」「本文批評と解釈」「古典文献情報処理」「古典の世界観」「日本における古典の伝承と受容」「世界における古典の伝承と受容」「近現代社会と古典」の班に分かれて共同研究を開始しました。1999年春からはさらに公募研究の約60名が加わり、総勢140人のプロジェクト全体が発足して、本年度まで4年間の研究を続けてきた次第です。

この共同研究の核心をなす活動は、7研究班がそれぞれ年に3回から5回ほど実施した研究会であり、これまで総計100回を超える研究会がもたれました。また今回を含め、8回の国際シンポジウムも開催しました。

この間の出版物としては、昨年出しました『第Ⅰ期研究成果報告』と『第Ⅰ期公募研究論文集』をはじめ、叢書『古典学の現在』を4冊、ニュースレター『古典学の再構築』を12号、池田知久氏の『郭店楚簡老子研究』のモノグラフを数冊刊行しました。そのほか、西洋古典分野の渡辺雅弘氏(『日本西洋古典学文献史』I, II), キリストン史に関する丸山徹氏, インド文献に関する金沢篤氏の仕事を出版しています。

また平田昌司氏は中国学分野の国際シンポジウム「文化的制度としての中国古典」を2000年7月に京都で開催されました。月村辰雄氏を中心とする「古典教育・古典教科書」に関する共同研究、木田章義氏、杉山正明氏を中心とする「日・中・韓刊本の研究」という共同研究などの研究も精力的に実施されました。また徳永宗雄氏が作成された17点のサンスクリット・テキストデータベースを公開しました。

これらの成果は、「古典学の再構築」のホームページ <http://www.classics.jp> において多くのご覧頂くことができます。また出版物はすべて本会場の入り口に展示しておりますのでご覧下さい。

2. 「古典学の再構築」の学術的成果

以上が「古典学の再構築」の概要ですが、次にその成果についてお話しします。

この「古典学の再構築」プロジェクトは準備段階から数えて6年、プロジェクト発足からも4年を経過しました。この間に40件の計画研究、56件の公募研究はそれぞれほぼ所期の成果を挙げ、古典学の基盤が一層強化されたことは申すまでもありません。このことはややもすれば実学に傾き勝ちな現今の中學政策の下にあって、貴重な成果であると自負してよいものと信じます。

しかし、「異領域の連携」というこのプロジェクトの眼目からすると、最大の成果は、「古典研究者の意識が変わったこと」であると私は考えています。どのように変わったかといえば、それは（1）古典学内部と、（2）古典学の社会的役割に関する意識、の二点に関する変化です。

先ず第一に、古典学内部の変化として、古典研究者の視野が格段に広がったことが挙げられます、この変化には「古典研究の方法論」と「古典に関する知識」という二側面があります。

（1）方法論の普及とテキスト理解の深まり

先ず方法論に関して、研究者は他分野の研究から大きな刺激を受けました。たとえば、西洋古典学における文献学としての成熟度の高さや文献批判の方法の堅固さ、聖書学における高水準の解釈学、あるいは中国学、西洋古典学における日本語訳の水準の高さは、私たちインド学者を驚かせるには十分でした。

また、逆に、インド学における高度な情報処理技法は、テキストデータベースをCD・ROMでしか利用していない分野の人々を驚かせました。CD・ROMのデータは、「便利な索引」の域を越えるものではありません。しかしインド学では、研究者自らPERLやAWKなどの簡易言語を用いて韻律分析や子音群分析、語彙統計などのプログラムを作成し、これを利用して文献の相互関係や相対年代の推定を行ない、内容理解が格段に深化しています。インド世界は歴史意識が希薄で、作者や成立年代不詳の作品や、数世紀にまたがる幾つものテキスト層を内蔵する文献も少なくありません。情報処理はこれらの文献分析に威力を發揮しています。このようなインド学の成果も、他領域に大きな刺激を与えたと信じます。

（2）他文明の古典に関する知識の獲得：プラトンと『スッタニパータ』

以上、「方法論」について報告しましたが、次に、「古典研究者の視野の広がり」の第2点として、「他文明の古典に関する知識の獲得」について話します。他文明の古典の内容を知ることによって、自分の専門とする古典の理解が深まったという報告も数多く受けました。私の知識の範囲は限られていますので、僭越ですが私の専門である原始仏教をその一例として、少し詳しくここに報告することをお許し下さい。

最古の仏教詩集『スッタニパータ』は、韻文ということもあり、体系的記述になっていないため、理解に大きな困難がありました。しかしこれ述べるようなプラトンの所説の構造が理解の助けとなりました。

たとえばプラトンによれば、「同じ風を人によって冷たいともそうでないとも感じる」という知覚の「相対性」、あるいは知覚者も知覚される物も絶えず変化するという「流転性」は、直接知覚の対象についてのみ成立するが、イデアには成立しない。知覚にはその成立条件として「価値」と「意味」が含まれており、そのような「価値」と「意味」を意識的に顕在化したうえで、その本来のあり方を追求することによってイデアの知に到達することができる、と言われます。

イデアは、すべての人に自明であるのではなく、カタルシスすなわち魂の浄化によって魂を欲望、情念から遠ざけることによって、イデアを知る思惟の働きが妨げられることがなくなる。こうして時間と労苦をかけ、厳しい教育を通じて初めてイデアに到達することが可能となると述べられています。

このような世界観は、仏教においても並行的なものを見出すことができます。仏教は紀元前4世紀頃に成立して以来千年以上の間に、多くの仏典が次々と作られ、その数は膨大なものがあります。この間に多様な教理的発展があり、仏典と称されるものは全体として見るならば、言語学、法律学、医学、天文学、生物学、地理学などを含む、殆ど百科事典的な様相を呈します。しかし、最近、音韻、語形、語彙、韻律などのコンピュータ分析によって新しい事実が明らかになりました。すなわちそれら無数の仏典の中で、確実にアショーカ王以前、すなわち紀元前3世紀半ば以前に定立されたと考えられるテキストは僅かに300詩余りである事が判明しました。それは、5章、1149詩からなる『スッタニパータ』という仏典の第4章と第5章の一部です。この最も古に成立した部分に比較すると、これ以外のすべての仏教テキストは1世紀以上後代に編纂されたものであると推定されます。

さてその最古の300詩に言わわれているところを簡単に纏めると、このようになります。

テキストは先ず、「人間の存在様式」についての考察から始めます。人は田畠、黄金、牛馬、女性、家族などの「欲望の対象」に捉えられ、それから離脱することは困難である。なぜなら、根本的に人間は生への「渴き」(trṣṇā) に動かされているからです。この「渴き」、これは後のテキストでは「潜在するもの」(anuśaya) と呼ばれるようになることでわかる通り、ふつうの人は気づき難いもので、そのためには妄想でしかない勝手な世界観を組み立てている。しかし自分ではそう自覚していない、と言われます。

『スッタニパート』はこのような人間のあり方を大変シニカルに描写して、結局のところ人間は「皆がそう考えるから」とか、「こう考えれば自分に利益があるから」とか、「権威を保ちたいから」とか、それからこれはちょっと耳の痛い話ですが「それが教えられた知識であるから」とか、実際にいい加減で、けしからん、あるいはつまらない、または根拠のない考えによって一つの世界観を持ち、それに固執している、と言っています。「世の中を見渡してみれば多くの人が「われこそ真実を語る、これ以外に真実はない」と言っているが、そのような人が多数いること自体それらが真実でないことを証明している」とも言います。

『スッタニパート』は続けます。このようなものとして、人の持つあらゆる見解は捨てられなければならない。しかし「あらゆる見解を捨てること」、それ自身も一つの見解として乗り越えられなければなりません。人のものの見方の徹底的な「相対性」がそこに明らかにされています。

テキストはここで、「人間の認識」のあり方についての洞察を始めます。人がものを認識するとはどういうことか。人の認識の対象である「もの」は「名称・色彩」(nāma-rūpa) と呼ばれます。これは先行する『シャタパタ・ブラーフマナ』や『ブリハッドアーラニヤカ・ウパニシャッド』以来の世界観を継承し、「人の認識は言葉による」という事実を端的に言い表している表現です。ものは名づけられることによって初めて認識される。ところがものが名づけられるとは、ものが評価されることであり、既にそこには根本的な「潜在欲望」による色付けがなされており、そこから先に述べたような人の見解の不確かさ、危うさが生じるわけです。

このことを『スッタニパート』は、何とか言葉で表現しようとして、これを克服し、解脱した人を次のように描きます。

874. na saññasaññī na visaññasaññī, no pi asaññī
na vibhūtasaññī,
evam̄sametassa vibhoti rūpam̄, saññānidānā
hi papañcasamākha.

「その人は、(生の) 表象を表象するのではない。作りあげた表象を表象するのでもない。また表象しないのでもなく、存在しないものを表象しているのでもない。このように到達した人に、「色彩(・名称)」は消滅する。なぜなら「妄想」と呼ばれるものは、表象に基づくのであるから。」

解脱した人は、普通の人が持っている既成概念による認識をもはや持たない。かといって、人から教わるにせよ、自分で作り上げるにせよ、縦に作り上げた認識を持っているのでもない。しかし認識しないのではなく、また存在しないものを認識するのでもない。このような人には、ものは「名称・色彩」的なあり方をやめる、ということです。

そこで最後に残された問いは、このような相対性を離れた認識はどうして到達できるか、ということになります。

『スッタニパート』によれば、それは人里離れた林にすみ、一日に一度、鉢を持って村に出かけて食物を乞い、あとは瞑想に時を過ごす無一物の生活です。しかも一つ所に留まらない一所不住の生活です。このような仏教の修行僧、比丘の様子は、次のように描写されています。

「孤独の場所で夜を過ごし、視線をふらつかせず、世俗の話しには耳を貸さず、快樂に執着せず、何物も所有しない。」

そしてその徳目は次のように言われます。

「動物・植物に優しく接し、温和で人を傷付けず、高慢でなく控えめであり、嘘をつかず、怒らず、貪らず、自分の行いをよく反省し、何物も恐れることなく、心が喜びに満たされている。」

要約すれば、自分が「潜在欲望」に突き動かされ、「妄想」しか持ち得ないことを自覚しつつ無一物で一所不住の修行に専念する人は、人に対して暖かく、慎みがあり、一切の不安を離れた喜びに満たされることになる、と言われていることになります。

人間を存在論的、認識論的に反省することから出発し、日常性の超越が目指されていることはプラトンにおいても『スッタニパート』においても共通に認められます。そしてそれに至るには、普通の人には日々の努力が必要であるとされる点も共通します。

異なることは、プラトンによれば、イデアは思惟に

よってのみ知られるとされますが、『スッタニパート』は、安心の境地は体を動かす遊行と瞑想の生活によって実現されるとすることです。潜在欲望に使嗾された、言葉による認識様式を脱却するには、繰り返し瞑想によってこの事実を直視し続けつつ、心身を別の状態に変える「生活様式」が必要なのです。仏陀の処方箋は、このように持続的瞑想と生活様式の変更を要請する点においてユニークであると言えます。

ただしプラトンにおけるイデア界も仏陀における涅槃界も共に「よりよき生」という理念に支えられており、両世界における人のあり方が「謙虚」、「平安」、「温和」など共通の言葉によって語られることにも注目すべきでしょう。「過程」と「到達点」における共通性と相違をさらに詳細に明かにすることが可能であり、重要であると考えます。

(3) 古典学の社会的役割

理想の生き方として、プラトンの場合、究極の善が根底にあり、それに支えられた種々の徳目が示されます。『スッタニパート』も欲望の世界を越えた人の徳目を記述しています。両者がただの倫理書と異なるのは、共によく練られた存在論、認識論から出発していることです。

例えば昨今、‘Sustainable Development’という概念が重視されるようになりました。しかし、人類が現在のライフスタイルを続けていては数十年後に破綻を来す、だからより環境に優しいライフスタイルに変えなければ、という議論には、何か重要なことが欠落している気がします。‘Sustainability’の思想に欠落しているのは、存在論、認識論に基づく世界観ではないでしょうか。確固とした世界観を欠いた思想では、似たようなライフスタイルを目標としたとしても、結果として実現する世界が全く違ったものとなることは想像に難くありません。

昏迷の世界といわれる現代において、1) 強力に発展する科学技術を制御すること、2) グローバル化した市場経済が提供するハード面、ソフト面両面の「気晴らし」(‘Divertissements’あるいは‘Entertainments’)によって人間らしい生活が冒されないようにすること、この二点が極めて重要であるように思います。

プラトンも『スッタニパート』も、存在論、認識論に基づき、モラル、すなわち人間のあるべき生き方を説いています。プラトンについては専門家に譲るとして、私は『スッタニパート』の世界観は、現代世界にそのまま適用され得るものではないとしても、‘Sustainability’や、「民主主義」、「博愛」、「自然愛」、「生

命倫理」など現在掲げられている諸価値を再検討しようとするととき、これまで看過されていた重要な視点を提示するものと考えます。

『スッタニパート』の視点は、人間が潜在欲望という桎梏を科せられた存在である、すなわち潜在欲望に突き動かされつつ言葉による「固定観念」の構築に汲々する存在であると自覚することから出発します。それが人生の苦しみの原因であると見極め、心の平安を獲得するために、知と行為の両者に関わる新しい「生活様式」を実践する必要がある、そうすれば固定されたものではない無限の可能性が個々の人に開けてくる、というものです。このような見方は、現代社会が直面する政治、経済、環境、教育、生命倫理などの諸問題を考察する上で重要な視点であると信じます。

今日は私の知識の限界から『スッタニパート』のみを取り上げましたが、おそらくどの文明の古典も、それぞれ大変強力な人間観、世界観を内包していることと思います。それらもまた同じくらい重要な視点を提供することでしょう。

私は古典学の役割は、このように古典に含まれる基本的価値観を引き出して提示することにあると考えます。これによって、それぞれの文明の伝統的価値観は現代にふさわしい形に脱皮することができます。また同時に、現代社会の諸問題の根源的再検討が可能となるでしょう。

古典学研究者がこのように自らの社会的責務を自覚したこと、これこそ特定領域研究「古典学の再構築」の最も重要な学術的成果であると私は考えています。それは、この自覚が個々の古典研究を活性化せんにはおかしいからであり、また、このようにして刷新された古典学が提出する成果は、現代社会の新しい価値観形成に大きな役割を果たすことができるからです。

古典学研究者がこうしてその責務をしっかりと果たして行くとき、「文明の危機」はあり得ないと信じます。